

「ジャパニーズイングリッシュ」の可能性を探る

田 村 雅 昭

はじめに

日本人の話す英語を「ジャパニーズイングリッシュ」、あるいは Japanese と English を合体させて「ジャングリッシュ」と称することがある。これは「本当の英語」ではなく、日本人が独りよがりで使っている英語のようなモノ、というニュアンスである。日本人が英語でおこなったスピーチを聞いていたアメリカ人が「意味はわからないが、日本語というのは英語と似ている言葉だ」と感想をもらしたという話は“都市伝説”のように語り継がれている。日本では外国語教育とは英語教育を指し、長年にわたりそれなりの努力を重ねてきた。それは、国際社会へのパスポートとして英語は必要なものとの認識があったからであり、時代の先進国である英米社会に近づける有効な手段であったからだ。

世界共通語としての英語の重要性はますます高まっている。各種国際機関における使用言語は 85 パーセント以上が英語である。加盟国すべての使用言語を公用語としている EU では、実際の作業や公式文書、公式な会見などではフランス語が使用されてきた。しかし、最近ではフランス語に代わり英語が使用されることが多くなってきている。米ドルの基軸通貨としての地位は必ずしも絶対的ではないようであるが、英語は今後ともしばらくの間はコミュニケーションツールとして重要な役割を果たしていくことが期待されるのである。

それでは「英語」は現在どうなっているのだろうか。英国とそれに続く米国の国際的地位の高まりとともに、英語はそれ以前にも重要な言語の一つではあったが、英語が世界に広がっていったのは 1970 年代からであった。政治的变化、通信メディアの驚異的な発達により国際的な広がりを見せた。それは ENL=English as a Native Language（母語としての英語）から ESL=English as a Second Language（第二言語としての英語）へ、そして EIL=English as an International Language へと英語のとらえかたが変化してきたことを意味する。この広がりの中で「英語」がさまざまな文化と融合し多様性を身につけ変化してきたのは当然のことである。

英語はネイティブスピーカー間においても同一ではない。ENL においてさえ米語、英語、カナダ英語、オーストラリア英語などは英語の種類を示す分類になっている。その意味において English は Englishes と認識されるのである。ESL から日本を含む EIL に拡大する Englishes は「インド英語」「中国英語」とますます多様化しているのであり、その文化が英語に反映し、ENL には存在しない表現が誕生し十分に共通言語として機能しているのである。

日本では英語教育が熱心に行われてきた。しかしながら、結果はアジア諸国の中で下から数えたほうが

早いといわれる程度の語学運用力しか習得できてこなかった。わが国では英米語を規範として異文化理解も英米社会を「国際社会」とほぼ同義語に捉える教授法が中心であった。この間に世界の英語を取り巻く環境はすっかりと変化しているのである。日本にも日本の英語 Japanese English という視点を当てはめてみたい。これは「日本でしか通じない日本人が陥りがちな英語」という意味ではない。むしろ「英米人のよう」ではない英語をすべて誤りとして切り捨てるのではなく、世界共通語としての英語を身につけるには何が必要かという観点から Japanese English の可能性を探るものである。

1. 英語の現状

英語は 1970 年代以降国際的に広がりを見せ、国境を越えて多様性を帯び、拡大変化しながら、国際コミュニケーションのための道具として利用されている。言葉は時代とともに変化していくものである。英語はこの国際的広がりのために ENL つまりネイティブスピーカーよりもはるかに多いノンネイティブスピーカーを生み出した。世界の言語使用状況をみると、母語として最も多くの人口が使用する言語は中国語であり、英語母語話者の倍以上であるが、公用語としての英語使用者は中国語が母語話者とほとんど同じなのに対し、英語は母語話者を遥かに超える人々が存在している。加えて EIL を含めると世界第一位の使用人口を誇る言語である。

世界の主要言語使用人口 (単位：100 万人)

	母語人口		公用語人口
1	中国語 (1,000)	1	英語 (1,400)
2	英語 (350)	2	中国語 (1,000)
3	スペイン語 (250)	3	ヒンディー語 (700)
4	ヒンディー語 (200)	4	スペイン語 (280)
5	アラビア語 (150)	5	ロシア語 (270)
6	ベンガル語 (150)	6	フランス語 (220)
7	ロシア語 (150)	7	アラビア語 (170)
8	ポルトガル語 (135)	8	ポルトガル語 (160)
9	日本語 (120)	9	マレー語 (160)
10	ドイツ語 (100)	10	ベンガル語 (150)
11	フランス語 (70)	11	日本語 (120)

出典：ケンブリッジ大学出版局「THE CAMBRIDGE FACTFINDER」1993 年刊

また、インターネットの言語別利用者数やコンテンツ使用言語の割合は英語が圧倒的であることからヨーロッパ、アジア、アフリカ、南米でも英語の流入、浸透は明らかである。さらに経済・情報のグロー

バル化は競争的環境の中で国境を飛び越えて世界の各地域を巻き込んで、一大ネットワークを形成している。今後の英語の展開予測を（Graddol 2006）から一部を抜粋する。

1. 英米以外の欧州、アジアで non-native speaker による英語学校が増え、英国と質量ともに対抗するものになる。
2. 多くの国での初等教育で英語学習が確立するにつれ、native speaker のもつ模範生は弱化する。
3. アジアがグローバル英語の将来を決定するであろう。特に中国、インドが英語の未来に大いなる希望を見出している。2050年の予想(Goldman Sachs)では最も世界をリードする国家は中国、インド、日本、米国、ブラジルなどとみられる。経済大国では中国、インドをあげている。
4. 英語国が持っている経済的優位性は次第に色あせたものになる。世界の英語母語話者に近い英語の使用者は増加しつつあり、彼らが英語を駆使して世界で活躍することになるだろう。

現在においても特に経済面では B R I C s と呼ばれるブラジル、ロシア、インド、中国が新興国として注目を集めている。この面における勢力図は変化を遂げているが共通言語としての英語の重要性は揺るぐことはないのである。ただし、その英語は World Englishes の枠組みで捉えられるもので、決して英語国のネイティブスピーカーの規範に留まるものではない。

現代英語のもうひとつのキーワードは「多様化」である。非母語話者は母語話者による英語を必ずしも絶対的な規範とはせず、それぞれの文化を背景に独自の要素を英語に加えている。英語の広がりにより英語の母語話者と非母語話者よりも非母語話者間の英語使用が多くなっている。これは必然的に英語母語話者が理解できない表現も生じてくるのである。アジアの概念である「面目」をプログレッシブ英和中辞典で引けば「face」とあるが英米の母語話者に解説抜きで

lose [save or maintain] (one's) face 面目を失う [保つ]

という真の意図が伝わるのかは、はなはだしく疑問であるが、これらの新しい英語を、誤ったものとして切り捨てたりしないところに英語が国際共通語として受け入れられている理由の一端がある。共通言語として最大公約的な文法や語彙、意味論、統語論など理解があれば異文化理解の強力な武器を手になり、異文化のすり合せをすることさえ惜しまなければ異文化リテラシーを高めることができるのである。

2. 日本人と英語

2-1 教育の混乱

従来、日本では高校・大学受験においては、英語を読解する能力が重視され、英文和訳を中心とした授業が行われている。いうまでもなく日本においては英語は母語でも公用語もなく外国語であることから読解能力も出版物は通常は日本語で事足りており、日常生活ではあまり役立たない。しかし近隣の韓国や

中国では早期に英語学習が取り入れられ、授業時間数も日本を大きく上回っている。英語運用力の低さに表れる国際コミュニケーション力の不足が取り上げられ、文部科学省は 2002 年に『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』を策定した。しかしながら、教師の育成も含めて課題は山積である。外国語を使って意思の疎通をはかれる、あるいは必要な用事を済ますことができる能力を「運用力」という。Omaggio 2001 は運用力志向の外国語指導に必要な要素として、次の 9 つを挙げている。

1. 目標言語社会で学習者が将来、実際に出くわしそうな場面・状況を設定して練習させなくてはならない。
2. 目標言語社会で学習者が必要となるであろうコミュニケーション機能やタスクを練習しなくてはならない。
3. 学習者が自分の表現質ことを表現できるようにしなくてはならない。
4. 機械的で答えの決まった練習ばかりでなく、学習者の創造性が活きる練習をしなくてはならない。
5. 学習者同士が積極的に話す機会を増やさなくてはならない。
6. 可能な範囲で自然な本物の言葉が使われなくてはならない。
7. 言葉の正確性は重要視されなくてはならない。
8. 学習者の精神的・知的ニーズにもこたえなくてはならない。性格の違い、好みの違い、学習スタイルの違いをも考慮すべきである。
9. 学習者が目標言語社会で周囲と調和を保ちながら暮らせるように文化理解も促進されなくてはならない。

指導する教師については「コミュニケーションの活動をする前に、まずは文法の指導をしなくてはならないと信じており、結果として授業はコミュニケーションの要素が一部に含まれていたとしても文法指導中心のものになっている。(Sakui 2004)」。教育現場では教授法の混乱が見られるのだ。教授法については Oral approach、Humanistic approach、に続いて Communicative approach が導入されたときには、すでに東南アジア、中国では先にこの教授法を取り入れていた。日本において学習指導要領でコミュニケーション能力の導入に踏み切ったのは 1989 年である。以来、英語教育への導入方法について研究が重ねられているが、その効果があがり真のコミュニケーション能力を習得できるかは不明である。

四 国際コミュニケーション能力を向上させるにはどうすべきかという議論が生み出した小学校への英語教育の導入については英語教育関係者の間でも意見が分かれるところである。英語が使えるとはどういうことか、従来の教育の何が不足で、何が誤りであったのかなど共通の理解をしっかりと確保して取り組む体制を、一刻も早く築き上げなければ、グローバル化社会の中で一定の地位を保つことはできなくなるであろう。

2-2 英語に対する苦手意識

「学校英語は役に立たない」と批判がなされてから久しい。以前の厳しい受験戦争に勝ち抜くために単語を丸暗記し、複雑かつ非実用的な奇妙な英語を詰め込む英語教育を経た者たちが、単純な英会話が理解できない、英語で意見交換ができない状況におかれ愕然とした思いを持ったことは想像に難くないし、英語教育を否定したくもなるであろう。Communicative approach が 1989 年に日本に導入されてから 20 年がたった今、詰め込み教育の反省から「ゆとり教育」が導入された時期の若者は大学生になっている。学校教育における英語は「変わって」きたはずであるが、結果としてのコミュニケーション能力は変わらないか、あるいはむしろ下がっているのである。すると、日本人には英語は向いていないのではないかという議論が起り、英語不要論が顔をのぞかせることになるのだが、結局は「英語の必要性」は無視できず頭を悩ますこととなる。英語は「国際社会へのパスポート」であるが、そのパスポートは持っていて当たり前で、なくては不自由をきたすものでもある。

なぜ、日本人は英語が苦手なのだろうか。まず、間違いを恐れて発言をしない、ちょっとした間違いを気にして黙ってしまう、完全な自信がない限り発言しない、など消極的な学習に対する姿勢が指摘される。これは、なぜ英語を学ぶのか、英語ができるようになるとはどういうことかという動機付けが重要になる。全体的に英語力が低くなっている教育現場では「大して努力をしなくても、それなりの成績はとれる」という緊張感の不足を感じてしまうのである。広く世界に目を向けるときに国際共通語の存在のありがたさと、それを習得することの必要性は実感されるのではないだろうか。

次に電子辞書の弊害を挙げてみたい。語学の学習において辞書を引くことは基本である。その意味において昨今の電子辞書の普及は喜ばしいことではある。多少重量を伴うこともあるのだろうが、以前は紙の辞書を持たない学生も見られ、教師を憤慨させたものである。その点、電子辞書は軽くて操作性もよいところでかなり普及している。

しかし、問題はその使用方法である。学生は知らない単語を見つけると瞬時に指先で検索をし、日本語の意味を探し出す。その処理能力は携帯電話で高められたものなのだろうか素晴らしいものであるが、その検索した情報は頭脳に蓄積されてはいないのだ。同じ単語を何度も繰り返し検索しているようでは「使える英語」を身につけるのは難しいのである。紙であるならば、目的の単語を探すプロセスにも脳を使うことで、その単語が記憶の端に引っかかってくるのである。

また、電子辞書ですばやく単語を引き出したとして、次にしてしまうことは「英単語のいくつかを日本語に置き換え、その日本語からイメージを膨らませ文の意味を創造する作業である。このときには英語の文法はほとんど無視されていることになる。これは英語の学習ではなく日本語の直観力の養成でしかない。

五

以上は英語に対する取り組み方、学習の姿勢の問題であるが、もっと重要な苦手意識の原因は発音の違いである。[l] [r] [v] [th] など日本語にない発音で英語習得の壁に突き当たることも少なくない。「英語は幼いころからネイティブスピーカーに習わなければ身につかない」と教育熱心な親は専門の塾に通わせたりする。確かにバイリンガルになるには脳の研究からしても大人になってからでは不可能だそうだ(池谷 2008:)。大人になってからの「学習」ではネイティブのようにはなれず日本語ナマリは消えないしバ

イリンガルは目指せない。しかし、それでよいのである。英語が使える日本人とはバイリンガルであることを意味するわけではないし、そのレベルの英語力は第二言語として習得目標とするべきものではないのである。

そもそも、ネイティブの英語とは何であるのか。日本人が学んできた英語は英米語で、これはもはや one of Englishes にすぎない。英語といえば従来はアメリカ英語が主流でイギリス英語がオプションという位置づけであった。語彙、文法、発音、マナー、すべてが英米が規範であり日本人英語学習者が目標とするべき絶対的な存在であった。そのため、例えばオーストラリア英語などに対しても特殊なものとして扱う傾向があった。英米語のみを正しいものとする崇拝するがゆえに「英語」を手の届きにくいものにしてきてしまったのだ。世界にはいろいろな英語がある。日本人も日本流に磨かれた英語でよいのだという開き直った気持ちが必要である。それは「世界に通じなくてもよい英語」などでは決してなく、国際共通語としての英語の範囲内での日本流である。そのためには、現在の英語が通じないのはなぜか、どうすれば通じるのかを分析し、それらに対応する必要がある。

2-3 日本語と英語の違い

言語とは一種の記号である音声を使って、意味を表す体系である。文字以前の音声から見ると日本語と英語には発音上の違いがある。これは、どちらの言語が優位であるという問題ではない。日本語と英語、それぞれ片方にあって他方ない発音の特徴があるということである。その意味で英語の発音ができないからといって、日本語母語話者が恥じたり劣等感を感じたりすることは不要なのである。日本人の発音が英米人に通じない理由を挙げてみる。

まず、発音数の差に注目してみる。英語には日本語のカナでは表現できない音声がたくさんある。

[bi]	[vi]	→	ビ	
[fu]	[hu]	→	フ	
[u]	[wu]	→	ウ	
[si]	[shi]	→	シ	
[di]	[ji]	[zi]	→	ジ

上記のように英語ではまったく別の音声であるのに、日本語では同じ文字があてがわれる。英語をローマ字表記で解釈し、そのままカタカナに振り分けていくと元の英語がわからなくなってしまうことが多いのは当然である。例えば see, she, sea はカタカナではすべて「シー」と表記されることになるのである。この中でも [vi] については「ヴィ」と表し [bi] と差別化を図ったり、「ジ」「ディ」「ズィ」などと日本語の表記方法を工夫し英語の多様性に対応しようとするが語から句、節へと音声がつながってくると脱落などの変化が生じて、さらに複雑になる。日本語は発音数が少ないのである。

次に無母音声も英語の特徴である。つまり子音が連続する音声である。日本語は必ず子音は母音を伴っているが、英語では子音の連続は珍しくない。

cry → クライ

world → ワールド

circle → サークル

これらはカタカナの発音では英米人だけでなく国際語としての英語の使用者にも伝わりにくいであろう。その意味で「日本流の共通語としての英語」にはなりえないのである。

この他には日本語には二重母音がないことも英語との発音の違いである。

boat, bought → ボート

coat, caught → コート

このように発音数が少ない日本語には当然の結果として「同音異義語」が多く存在する。

「きしゃのきしゃがきしゃできしゃする」

この「きしゃ」には「貴社」「記者」「汽車」「帰社」が想像されるのであるが、日本人はこの作業をこなしてしまうのである。この意味で日本語は「推測言語」である。

「私たちは耳から聞いた言葉の意味を、多数の「同音異義語」の組み合わせの中からの的確に選び抜いて、瞬時に理解するという高度な処理を行っているのです。」(池谷 2008: 25)

日本語のこの特性のために日本人は英語を話していても、日本人以外の相手に適切な「想像力を」要求している。つまり、正確に発音しなくても文脈から、あるいはその場の「空気」から、何とか受け手のほうでよいほうに理解してくれることを期待するのである。それが可能なら、英語を話すことが今ほど苦痛ではないかもしれない。英語を使用するほうはといえば、残念ながら、特に音声についてはそのまま理解しようとするのである。

「彼らがまったくの類推のできない人種なのかというと、決してそういうわけではありません。実際、発音のミスとは違って、文法のミスには英米人は寛容です。すこしくらい単語の順番を間違えても、冠詞や前置詞を付け忘れても、時制を取り違えても、文脈から意味を察してくれることでしょう。」(池谷 2008: 27)

英米人に伝わるかどうかという意味では文法的なミスよりも発音のミスのほうが致命的であるということだ。

3. カタカナ英語の可能性

「カタカナ英語」というと英米人の英語とは違い、日本語流に発音された伝わらない英語という意味で用いられ、この意味においては「ジャングリッシュ」と同義である。英語の発音を表記する方法としては「発

音記号」がある。カタカナとは違い発音記号をマスターしさえすれば、絶対に伝わる発音を学習できるのである。しかし、中等教育を終了した段階でどれだけの人数が「発音記号」を読み、理解し、再生できるであろうか。特に高い志を英語にたて、よき指導者に恵まれ、集中的な努力を重ねたものでなければ、習得するのは困難である。大半の英語学習者は発音をカタカナで表記しているものと思われる。これではいつまでもたっても英米人には伝わらない英語を学ぶためにむなしく時間を割くことを続けることになってしまふ。

従来のカナフリの問題点は英語を聞いたまま書くのではなく、外来語として先に入っている知識から日本語の音にしてしまっていることであった。Hat は「ハット」、cat は「キャット」というように本来英語にはない促音が入った、まったく別の音声を当ててしまったのである。先に述べたように英語と日本語の完全なる音声の置き換えは不可能なことである。しかし、通じることを第一に考えれば音声を聞こえたままに表記する手段にカタカナを生かすことは誤りではないであろう。カタカナ発音を英語の音に近い別のカタカナに書き換えることによって通じる英語が話せることになる。これは江戸時代のジョン万次郎が漂流の末、アメリカに渡り現地で英語を身につけた手法でもある。彼が書いた日英辞典のような単語集からいくつかを抜き出してみる。万次郎が自分の耳だけで聞いておぼえた英語をカタカナ書きしたものである。

A) 1. ナイ, 2. モヲネン, 3. イヴネン, 4. コヲル, 5. ネ

これらを現代風なカタカナで表記すると以下ようになる。

B) 1. ナイト, 2. モーニング, 3. イブニング, 4. コールド, 5. ネット

英語では以下ようになる。

C) night morning evening cold net

A) と B) ではどちらが英語に近いであろうか。言い換えれば、どちらのほうが英米人に伝わりやすいだろうかということになる。

B) のような発音表記はヘボン式表記法等ローマ字が日本に定着した際に、ローマ字が英語発音をカタカナで表すのに一番適していると考えられてきた。われわれが触れてきたカタカナ英語は、自分の耳で聞いた英語をカタカナになおしたのではなく、アイウエオは a, i, u, e, o、カキクケコは k a, k i, k u, k e, k o という具合に、置き換えてできたものである。英語圏で生活することになったジョン万次郎が「聞こえたまま」の英語をできるだけ忠実にカタカナ化しようとしたもののほうが「通じる英語」の表記方法だったわけだ。

カナフリのパターンはいくつかの法則として整理ができるが、取りあえずは単語レベルから初めて、会話の決まり文句を練習してみるのが効果的であろう。例えば

What should I do? は

ワット シュッド アイ ドゥ ではなく

ワッシュライドウ

とカタカナ表記を改め練習することだ。

カタカナを振っている以上は、完璧な英語の発音つまり英米のネイティブ英語とは違っているわけでカタカナ発音に批判もある。ネイティブに英語が伝わるようにカタカナで示したとしても、通じないのではとの懸念が生じる。もう一つ重要な要素はアクセントである。強弱の言語である英語ではアクセントの位置をしっかりとおさえて発音する必要がある。これで日本人が英米人に英語を通じさせる可能性はずっと高くなるのである。

日本人は日本人的な英語の発音でよいのである。もちろん、通じる範囲のことであるのは言うまでもない。しかし、通じないと失望する前に自分の英語は相手に聞こえていたのか、発声は十分であったか、重要な単語を強く発音できたか、アクセントは正しかったかを振りかえる必要がある。英語を話すときの日本人は、かなり声が出ていないことが多いのである。

おわりに

英語を英米人のネイティブのように操れるなら、それは素晴らしいことではある。ただし、それを持って英語を完璧に習得したというのは不十分である。なぜなら、国際語としての英語はもはや母語話者の範囲を大きく超えて世界中に広がり、それぞれの文化の洗礼を浴びて独自の変化・進化をつづけているからである。母語話者であることは確かに優位な地位を与えられているのではあるが、絶対的な立場ではなく、非母語話者同士で理解しあえることが、母語話者には聞いたこともないし想像もできない表現として向けられることも珍しくはないことである。このような環境においては我々は英米人の英語のみを正統ととらえ崇拜し、他のものは誤りとしてしまう大いなる誤解をすることがないよう、広く英語を受け入れる姿勢が大切である。

赤ちゃんが自然に言葉を覚えるのは「獲得」で大人が言語を覚えるのは「学習」である。大人には赤ちゃんのように言葉を獲得することはできない。ゆえにバイリンガルを目指すのは無意味であるが、コミュニケーションの手段として英語を操ることは不可能なことではないのである。英語は苦手とする人が多い日本人ではあるが、文法力や読解力の基本は意外としっかりとしている場合が多い。謙虚すぎる性格なのだろうか、自信を持っている人は多くはないようであるが。

日本語にない発音ができない恐怖から心を開放し英語の音を昔の先人のように、素直に記録し再現してみる。ローマ字表記の束縛から逃れられないカタカナを振るのではなく伝わる英語を活用したい。日本人ナマリの英語で結構。通じなかったら、再度取り組めばよいのである。

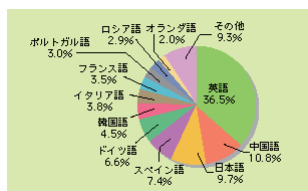
九

「あなたの英語が通じなかったからといって、落ち込むことはありません。その同じ英語が、ほかの人には通じたかもしれないのですから。英語にも話される国や地域によってそれぞれ特色があり、同じ英語圏であっても使用法がまったく違うこともあるのです。つまり、英語を母国語とする人どうしであっても、会話の意味を問いたださねばならない状況もありうるのです。」(Walsh 215)

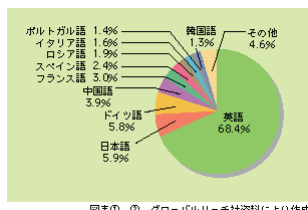
参考文献

- 荒井佐念子 2001 『英語は英語で勉強するな』主婦の友社
- 池谷裕二 2008 『怖いくらい通じるカタカナ英語の法則』講談社
- 今井、ジュミック 2009 『フォニックス〈発音〉トレーニング Book』明日香出版社
- 門田修平 2007 『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
- 小池生夫 2007 『外国語教育の国際的動向と日本の外国語教育政策』明海大学大学院応用言語学研究 No.9
- 佐々木瑞枝 2008 『外国語としての日本語』講談社
- 本名信行 2007 『英語の多文化化と異文化間リテラシー』明海大学大学院応用言語学研究 No.9
- 山田雄一郎 2005 『日本の英語教育』岩波書店
- Graddol, David, 2006 『English Next』. British Council.
- Krakower, Marsha, 2009 『日本人の英語力』小学館
- Omaggio Hadley, A., 2001 『Teaching Language in Context 3rd ed』 Heinle & Heinle
- Petersen, Mark, 2009 『日本人の英語』岩波書店
- Sakui, K., 2004. 『Wearing two pairs of shoes: language teaching in Japan』 ELT Journal Volume 58/2. Oxford: Oxford University Press.
- Thayne, David A., 小池信孝 2008 『その英語、ネイティブにはこう聞こえます』主婦の友社
- Walsh, Stephen James, 2005 『恥ずかしい和製英語』草思社
- 山川学而 エッセイ《英語と日本語の不思議な関係》(3) ジョン・万次郎の英語
<http://homepage1.nifty.com/monet2/English/manjiro1.html>

図表 1) インターネット利用者の言語別人口の割合 (2002 年 9 月)



図表 2) ウェブ上のコンテンツに使用されている言語の割合 (2002 年 9 月)



図表①、② グローバルリーチ社資料により作成